

# 大阪メモリアル・パーク野外礼拝説教

2019年11月4日（月・祝）

『天国を約束してもらおう』 井上隆晶牧師  
ルカ福音書23章～43節

## ①【隠退した牧師たちのいうこと】

10月15日に「香柏会（こうはくかい）」という名前の、隠退された牧師先生たちをお招きして礼拝と交わりの時を持つ集会をいたしました。そこで先生方がひと言ずつ語って下さるのですが、やはり死の問題について多くの方が話されたと思います。

- ・最近の講壇からは「再臨」のメッセージが聞かれなくなった。ゴールのないスポーツというのではない。キリスト教のゴールは再臨だ。それなのに信仰のゴールについての話をしないということはおかしい。
- ・日本人に伝道するには、もっと死の問題を語らなければならない。人はだんだんと死んで行く。父は牧師をしていたが50代で亡くなったが、亡くなる前に「初めて分かった」といって亡くなった。
- ・自分は今、死の準備をしているが、讚美歌21の484番『主われを愛す』の3番に「みくにの門をひらきてわれを、招きたまえり、勇みて昇らん」という歌詞があるが、どんな気持ちで勇んで死ねるだろうか。神の国に行くイメージが自分にはない。神の国のリアリティーがなく、神の国に対する希望がはっきりしていないのだと思う。

それを聞きながら、私たちはふだんはあまり死のことを考えないのですが、高齢になると死は切実な問題なのだなあと思いました。それと、ある先生の言われた「神の国に行くイメージがない」「神の国に対する希望がはっきりしていない」という言葉は全くその通りで、考えさせられました。

## ②【天国を約束された強盗】

聖書は天国（神の国、楽園）があること、人は死んだら、この世でしたことについて裁きを受け天国と地獄に分けられることなどは書いていますが、天国がどのような世界であるかは具体的には語っていません。天国のイメージというのは、人それぞれ違うようです。向こうに行つてのお楽しみなのかもしれません。それより向こうの世界に行くことへの恐怖を少しでも無くすことしかできないと思います。

●私の友人の牧師が6月に62歳で永眠されました。彼は亡くなる前に、「ガンを生きる」という題の本を出しました。亡くなる三か月前までの気持ちが日記のように書かれていました。そこには家族への感謝、一人旅立たねばならない孤独感と寂しさ、すべてを神に委ねきれないもどかしさ、死の恐怖に向き合っている姿が書かれ

ています。天国への憧れや熱望のようなことはあまり書かれていません。最後の日記にこう書いてあります。「もう今年いっぱいのような気がします。そう口にする、妻とヘルパーさんが怒ります。聞いている方もしんどい。」友人の信徒さんにはこう言われます。「お前、牧師やろ。死んだら神のみもとに行けるんやろ。ハレルヤ！言うて喜ばんかい、うっとおいしい顔しとったらアカンやろ」笑い話でしょ。牧師が信徒に叱られるのです。人は生きてきたように死ぬと言いますが、その通りだと思います。彼の元気だった時の姿と同じなのです。甘えん坊というか、素直というか、いつもぼやいていました。なかなか信仰がもてない、死を受け入れられないもどかしさを感じます。

彼がこの後三か月でどう変わったか分かりません。最後までジタバタして亡くなったかもしれません。でも他人事ではないのです。死はぶっつけ本番です。だから死ぬ直前の気持ちとかは誰も書けないのです。周りの人を通して知るしかありません。

先程読んだ箇所は、イエス様の十字架の場面です。イエス様の十字架の右と左には二人の強盗が同じように十字架につけられました。丘の上には三本の十字架が立てられたのです。ところが右と左の強盗の運命は変わってしまいました。左の強盗は自分の不幸を神や人のせいにして恨んで死に、地獄に落とされました。右の強盗は、自分の罪を悔い、キリストに憐れみを請い、キリストから天国を約束されました。

「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(ルカ 23:43) 私の知る限り、聖書の中で死ぬ前にキリストの口からはっきりと天国を約束されたのはこの強盗だけです。彼はこれから行く所をはっきりと告げられました。しかも一人ぼっちではなく、イエス様と一緒にとも言われたのです。この言葉によって彼は死んでももう安心だと思ったと思います。向こうの世界に行きやすかったのではないのでしょうか。彼は善い行いをしたので天国に行ったのではありません。強盗殺人を行ったのですから、むしろ悪いことをしたのです。ただ自分の罪を悔い、キリストの憐れみを求めただけです。だから人は自分で天国に入るのではなく、キリストに入れてもらうのです。救い入れてくれる大きな手を信頼することしかできないのです。

聖書は天国のことをいろんな表現で語っていますが「**天の故郷**」(ヘブライ 11:16) という表現があります。故郷というのは出てきた場所であり、帰る場所です。天国から私たちはこの世に来て、再び帰るのです。高齡になるということは、この世での仕事を終わり、だんだんとこの世にいる意味がなくなるということだと思います。子育ても終わります。仕事も退職し、若者に譲ります。親族や友人も亡くなり、この世に知り合いが無くなってきます。病気や高齡になって体が壊れて来て、この世で使えなくなります。だからこの世での自分の居場所がなくなってくるのです。そうやって自然に向こうの世界、天国への憧れを持つようになってくるのです。徐々にこの世に死んで、神の国に生きるようになるのです。地と天が入れ替わるということなのでしょう。

### ③【修道院での葬儀】

カトリック司祭で、聖マリアンナ医科大学特任教授をされている小田武彦神父という人がいます。一度だけお会いしてお話を聞いたことがあります。とても物静かな方なのですが、深いお話をされます。その方がこんなことを書いていました。

●「ある観想修道会で葬儀を司式した時、それまでにない体験をしました。観想修道会というのは一旦入ったら一步も外に出ませんから、そこで生きるシスターたちは家族よりも濃い関係を持っています。その一人ひとりが、お亡くなりになったシスターに挨拶に来られる。その嬉しそうな顔を見て驚いたのです。暗いチャペルに復活のローソク一本だけが灯る中、本当に嬉しように挨拶しているんです。『あなたはいよいよイエス様のところに行くのね!』と。」

友が亡くなったのに嬉しそうな顔をされているというのです。これは大袈裟でしょうか。そうではないと思います。修道士や修道女たちというのは、いつも死と向き合い、天国を見つめて生きていると思うのです。それがこのような姿となって現れたのだと思います。小田神父は続けてこう書いています。「死をどう考えるか。その出発点は洗礼にあります。洗礼を受けたということは、キリストの死に結ばれたということです。」「聖餐も私たちの死と切り離すことができません。…聖餐式を行うごとにキリストの死とより一層結ばれ、キリストの体に変えられていくのです。」

つまり私たちは、この世ではまだ完全にキリストと一体にはなれないのですが、肉体の死によって完全にキリストと一体になって復活の体に変えられるということなのです。だからシスターたちはまるで恋人に会いに行くように、死を喜んだということなのです。ここに死の恐怖を乗り越える秘訣があると思います。それは神に恋すること、キリストに恋をすることです。愛する者とはいつも一緒にいたいのです。

強盗は「イエスよ、あなたの御国においでになる時には、私を思い出して下さい」(ルカ 23:42) と祈りましたが、私たちもイエス様に対する愛と信頼を日々強くしていきたいと思います。